

郡和寒町や帯広市などで販売されている（嘉見 2016）。

4. カボチャのこれから

先の項目でも挙げたが、カボチャはハロウィーンの需要があるにもかかわらずその生産面積は下がっている。この原因としては重たいカボチャ果実の収穫を未だに人手に頼っており、高齢化が進むカボチャ産地にとって大変な重荷になっていることが挙げられる。現在、収穫用の機械開発が検討され、一部販売もされている。しかし、それでも蔓から果実を切り離すなどの作業は人手に頼り、それもまた大変な労働となるので、今後もさらなる研究開発が必要になる。

本稿の内容の一部は、農林水産省委託プロジェクト研究「海外植物遺伝資源の民間等への提供促進（PGRAsis プロジェクト）JPJ007117」の補助を受けて行った。

引用文献

早瀬広司 1956. 南瓜属の交雑に関する研究：VII. 柱頭において花粉が発芽開始する時刻と葯の裂開. 育種学雑誌 5, 261-267.

早瀬広司 1974. 「農業技術大系」野菜編 第5巻. 農山漁村文化協会, 東京.

伊藤喜三男 2011. 北海道野菜史話 1. カボチャ. 北農 78, 193-199.

嘉見大助 2016. 種子食用カボチャ F1 品種「ストライプペポ」とその育成経緯. 北農 83, 364-367.

Kami, D., *et al.* 2019. Collaborative Exploration of Plant Genetic Resources in the Central Highlands of Vietnam, 2018. Annual report on exploration and introduction of plant genetic resources. 35, 56-70.

杉山ら 2009. 省力性と良食味のかぼちゃ新品種「TC2A」の育成とその特性. 農研機構研究報告 北海道農業研究センター 190, 1-19.

杉山ら 2017. 貯蔵性の良い短節間性カボチャ新品種「ジェジェ J」の育成とその特性. 農研機構研究報告 北海道農業研究センター 206, 1-19.

杉山ら 2019. 貯蔵性、加工適正の高い短節間性カボチャ新品種「おいと栗たん」の育成とその特徴. 農研機構研究報告 北海道農業研究センター 208, 1-27.

その他参考図書

藤枝国光 1993. 野菜の起源と分化. 九州大学出版会.

田畑の草種

烏柄杓（カラスビシャク）

ハンゲという妖怪が村々を徘徊していた。

夏至を10日も過ぎたころ、妖怪ハンゲが山から下りてくる。ハンゲは体が大きく手を伸ばせば雲にも届き、体に纏う薄絹はしっとり水を含み、歩くたびに周りに黴の毒素をまき散らすという。

吾作は元来怠け者の農家であったが、それでも自分でしなければならぬ田んぼ仕事と畑仕事は何とかこなしていた。ある年、毎日のように雨の日が続き、働き者の農家でさえ田んぼ仕事も畑仕事も遅れ気味で、雨だからといって怠けていた吾作の田んぼ仕事は、とうとう「半夏生」に入ってしまった。

周りから「吾作や、妖怪ハンゲが山から下りてくるぞ」と言われたが、吾作は意に介さなかった。その日、大雨が降って吾作が準備していた田んぼも畑も大雨で流されてしまった。這這の体で家に逃げ帰って、庭先にある井戸から水を飲もうとしたが、水が濁っていて飲めそうもない。家に入って残っていた飯を食べようとしたが黴で、食べられなかった。

「吾作よ。大雨はな、『半夏雨』といって妖怪ハンゲが長い手を伸ばして雨を降らせる雲を引っ張ってきたからじゃ。井戸が濁るのはな、ハンゲが降らせる雨には毒気があるからじゃ。家に置いていた飯が黴ているのは、ハンゲを包んでいる着物や空気には黴があるからじゃ。吾作よ、だから田んぼ仕事も畑

（公財）日本植物調節剤研究協会
兵庫試験地 須藤 健一

事も『半夏生』までには終えんといかんのじゃ。妖怪ハンゲが出てくるまでにな。それでな、ハンゲが山から下りてきたときにはゆっくりと休むように決まっておるのじゃ」

村の年寄りにそう言われて、翌年から吾作も皆と同じように「半夏生」までには仕事を終えるようになった。

夏至から数えて11日目から5日間を雑節の「半夏生」という。薬草である「半夏」が生えてくるところとされる。「半夏」はカラスビシャクの根茎や零余子を乾燥させた生薬で、昔は根茎を掘って薬屋に売っていたともいう。

カラスビシャクはサトイモ科ハンゲ属の多年草。全国の畑地、樹園地、畦畔などに生育する。背丈は20cm～40cm、葉より高い位置に花をつける。その花のように見えるのは苞で、仏炎苞と呼ばれ、ハンゲ属、テンナンショウ属の特徴である。仏炎苞は帯緑色～白緑色、長さ6～7cm、筒部は狭円筒形。仏炎苞の中に肉穂花序があり、下部に子房のみの雌花、その上部に葯のみの雄花をつける。花軸の先が鞭状で苞の外に飛び出し特徴的な仏炎苞となる。花期は5月～7月、花が終わると地上部は枯れるが根茎や零余子が残り、「半夏」として集められた。カラスビシャクの名は、仏炎苞が柄杓のようにみえるが役に立たない柄杓という意味で烏柄杓と名付けられた。